

平成 26 年 2 月 6 日

日本テレビ放送網株式会社

代表取締役社長 大久保好男 様

特定非営利活動法人 CAP センター・JAPAN

(キャップセンター・ジャパン)

理事長 側垣 一也

〒662-0825 兵庫県西宮市門戸荘 17-34 スマイルビル 105

TEL:(0798) 57-4121 FAX:(0798) 57-4122

E-mail:info@cap-j.net

日本テレビ ドラマ『明日、ママがいない』に関する意見

私たち CAP センター・JAPAN は、1995 年から実践者を養成し幼稚園・保育所、小学校、中学校で子どもへの暴力防止プログラム (CAP (キャップ) プログラム=Child Assault Prevention) を教職員、保護者、子どもにそれぞれ提供してきました。その活動の中で、虐待などの人権侵害を受けて育ち、さらに施設などに入所措置された後も人権が守られているとは言い難い状況の中で暮らす子どもたちに向け、2002 年からプログラムの提供に取り組み、社会的養護の現場に関わるおとな (施設職員、里親)、そして社会的養護のもとに暮らす子どもたちと関わってきました。社会的養護の現場を知り、すべての子どもの人権擁護に携わる民間団体として意見書を提出いたします。

1. 社会的養護に関する誤解や偏見を強化しないよう努める責任を果たしていただくよう要望します。
 - (1) どのような監修・取材を経て、番組の意図やドラマが制作されているか、子どもにもたらす影響をどう考えているのかなどを広く明らかに説明してください。

*社会的養護だけでなく、すべての子どもたちに対して与える影響を考えると、「最後まで見ればわかってもらえる」「配慮する」という現在の説明では、ドラマの終結までにかかる時間を考えるとあまりにもリスクが高いと考えます。リスクがあるなかで番組を継続する以上、広く説明することをお願いします。
 - (2) 全国児童養護施設協議会や全国里親会、慈恵病院などの特定の機関だけでなく、すべての人たちに明確に説明してください。

*今回の問題は、舞台となっている社会的養護に関わる機関・団体だけでなく、すべての子どもたちに関わり、子どもを社会がどう扱っているかという社会全体の問題であると考えます。視聴者、あるいは社会にむけて明確に説明をお願いします。
 - (3) 重要な課題にスポットを当ててドラマを制作されているのですから、これを契機にぜひ社会的養護のもとに暮らす子ども、社会的養護の現場、働く人・里親などについて正しい情報が伝わるように長期的に取り組んでください。

2. 今後の番組制作にあたっては子どもの発達や子どものトラウマなどについて専門家から意見を聞き、監修を受け、子どもの人権侵害とならないよう努めてください。

(1) 子どもたちは映像による影響を受けやすいことを常に念頭において番組制作にあたってください。

*社会的養護のもとで暮らす子どものフラッシュバックについて報告されていますが、フラッシュバックに至らないとしても、心理的影響は大きいと考えられます。例えば周囲がどう思うかという不安や恐れ、自分にもドラマで見たことが起きるかもしれないという将来にむけての不安も考えられます。

現在、社会的養護の現場で暮らす子どもだけでなく、本来、社会的養護はすべての子どもにとってのセイフティ・ネットであり、子ども自身が自分にとって役立つ社会資源であると認識することは重要であるにも関わらず、誤った情報によって不安を煽る可能性があります。

社会的養護の現場が多く課題を抱えていることは事実ですが、センセーショナルに扱うのではないやり方で、社会全体の問題としての気運を高める有効な番組制作を要望します。

(2) 視聴するにあたってケアを必要とする可能性について現場（社会的養護の現場だけでなく、学校・幼稚園等の子どもに関わる機関）に注意を喚起し、子どもたちの変化やSOSへの対応を求めてください。そのためにも日本テレビとして、会見等での発信をお願いします。

*番組に対して、全国児童養護施設協議会や全国里親会、慈恵病院から意見書等が提出されましたが、子どもたちがSOSのサインを出したり、変化が起きるのは施設等の社会的養護の現場だけではありません。また、現在社会的養護のもとにいるのではない子どもたち、ケアを受けられる環境にない子どもたちにとっては、学校・幼稚園等が重要な役割を担っています。すべての子どもたちがケアなどの必要な対応を適切なタイミングで受けられるように、学校・幼稚園等を含む子どもに関わる機関に注意を喚起し、適切な対応を日本テレビとして呼びかけてください。番組制作に配慮をしても、フラッシュバックなどの子どもたちへの影響はコントロールできるものではなく、しっかりとケアできる環境を整えることが重要です。社会的養護の現場にも、その対応を呼びかけて下さい。

(3) 今回の改善（配慮）にあたっては社会的養護のもとに暮らす子どもだけでなく、すべての子どもたちを対象として検証し、対応をしてください。番組制作する側がどんな意図だったかではなく、受け止める側である子どもがどういう状況になっているのか、どんな気持ちになっているのか、どんな感覚でいるのかに目を向けてください。配慮の対象となる子どもは社会的養護のもとに暮らす子どもだけでなく、様々な状況に暮らすすべての子どもを念頭においてください。

*衣食住をおとなに依存せざるを得ず、「子ども」ということで弱者の立場に置かれている社会構造のなかで、虐待といった個別の事象が現れています。社会構造を意識し、番組制作が行われなければ同じ事が繰り返されることを懸念します。『明日、ママがいない』は、子どもたち自身の無力感を強化してしまうと感じています。

困ったときにもなんとかなる、なんとかしてくれる社会だという根拠のない信頼が重要であるにも関わらず、社会全体が子どもを大切にしていないことをメッセージとして提供してしまいます。そのことは次世代の子どもたちをも同様の位置づけ・構造のもとにおいてしまう可能

性があります。

番組を制作するおとなの意図を優先するのではなく、社会的な弱者の立場におかれている「子ども」の視点で見なければ、子どもの人権侵害に思いを至らせることはできません。

*現在、社会的養護のもとに暮らす子どもにとって、これまで他団体からの要望・意見書等にもある子どもの傷つき以外に、周りが社会的養護をどう見ているのか、どう感じているのかという懐疑的な気持ちを子どもが抱き、社会への信頼の構築を難しくする可能性があります。

*今後、社会的養護のもとに暮らすことが選択肢となる子どもを考えると、虐待が疑われ、通告された子どものうち約9割は、在宅での見守りという状況です。また、通告されるものは氷山の一角にしか過ぎません。社会的養護はこれらの子どもたちが、自らの育ちの中での選択肢となりうるものセイフティ・ネットであるにも関わらず、不安や恐れを抱かせることとなります。また、このような子どもたちは、ドラマを見たことによる何らかの傷つきや揺らぎに対してケアを受けられない環境にある可能性は高いと容易に想像できます。

*社会的養護のもとに暮らす子どもの周囲の子どもとおとな、そして、現在はまったく社会的養護に関わっていない子どもとおとなについての影響を考えると、通告を躊躇することにつながる可能性があります。さらに、社会的養護のもとに暮らすことへのネガティブなイメージを植えつけられる可能性があります。そのことは、社会的養護を現在活用し、子どもと離れて暮らすおとなにとって、社会がどう見ているのか、どう感じているのかと不安になり、今後の子どもとの関係に障壁をつくる可能性があります。

以 上